
第5回小笠原祥子の人生相談室

紅い稲妻

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

第5回小笠原祥子の人生相談室

【Nコード】

N7595I

【作者名】

紅い稲妻

【あらすじ】

前回同様にコメディーです。

今回もさっちゃんはその人同様に壊れています。

ご堪能頂けたら幸いです。

時は2月、様子達がするこのミニFMでの相談室も、あと僅かな回数となった。

卒業すれば、次期薔薇さまである祐巳と由乃の2人が引き継いでやってくれる事になっている。

少し感傷的になっていたのか？

新しい世代の薔薇さまが作る世界を想像して、ドボルザーク「新世界」第2楽章をOPに使った。

「では、最初の方です。どうぞ」

「PNはスクープ命です」

「三奈子さん。下らない話なら切るわよ」

「さすがは様子さんね。よく解ったじゃない」

2人のやり取りに祐巳はビビっていた。

冷たく言い放つ様子に、軽く受け流す三奈子のやり取りにハラハラした。

「一応、話だけは聞くわ。で、三奈子さん、わざわざ私に相談するなんて、どのような事なのかしら？」

ツンと澄まして様子が聞くと、

「最近、誰かしらに付け回されてるみたいなのよ」

内心ドキッと様子はしたが、白々しく、

「気のせいじゃないかしら」

「だと、最初は私も思ったの、でもね、黒いサングラスに黒服のスーツを着た男達が付け回すのよ。しかも、みんな身長が180センチもある大男ばかりで！それも、外国人ばかり！」

ビクッと様子はする。

「三奈子さま！怖いじゃないですか！モテモテで羨ましいです！」
なんて、祐巳が横から口を挟むが、三奈子と放送を聞いていた人間は呆れて絶句した。

但し、祥子はそれに乗る事にした。

「そうよねえ。羨ましいわよね。さぞかし、素敵なお方でしょうねえ」

「そんな事はないわよ！」

満更、悪い気がしてない様子で三奈子は答える。

どちらかと言えば、照れていると言った方が正解ではある。

「でもね、校内でも誰かにつけられてる気がするのよねえ。誰かまでは特定できないけれど…」

祥子は絶句した。

だが、またもや、天然な紅い狸に救われる。

「もうじき、卒業するから、三奈子さまのファンが別れを惜しんで、そっとつけているかもしれませんよ！」

とんちんかんな答えを出す祐巳だが、またもや、祥子は乗る事にした。

「そうよ。三奈子さん！きつと、そうに違わないわ！そんな物好きな人はいないだろうけど、そうに違いないわ！」

何気に酷い事を言っているが、そこは前向きで猪突猛進型の三奈子だけあって、自分に都合の悪いところは聞こえてなかったようだ。

「えっ、そうかしら？」

三奈子は満更でもない様子で、嬉しいそうにする。

いろんな意味で、妹の真美が聞いていたら、殴り込みにも来そうな事を話しているが、幸い取材で来れそうになかった。

「そうですよ。三奈子さまとても綺麗な方ですから、性格は別ですけど…」

しっかりオチをつけて祐巳は話すが、もう舞い上がっている三奈子には、都合の良いとこしか耳に入らない。

「祐巳さん、有難う。良い事言うわね。お宅の妹さん」

完全に三奈子は逝っていた。

「という事で、解決しましたね。では、ごきげんよう」

「ごきげんよう」

祥子はホッとして電話を切った。

「まだ、時間がありますので、次の方です。ごきげんよう」

「ごきげんよう。祥子に祐巳ちゃん！」

東京都武蔵野市は寒かったが、この祥子がいる場所だけは、電話に出た声の主が原因で、南極並に寒くなった。

「ご、ご、ご、ご、ごきげんよう、お、お、お姉さま」

祥子の声は震え、完全に裏返っていた。

「その様子だと、なんで電話したか？解っているようね」

「いいえ、お久し振りなので、驚いただけですわ」

その割に声は裏返ったままだ。

「あっ、そうだ。PNを言うのを忘れていたわ。PNは祥子専属特殊部隊で良いかしら、それとも、特務機関の方かしら」

祥子は思わずステンとひっくり返える。

ドカバタガツシャーンという音が響いた。

「お姉さまー！しっかりして下さーい！」

祐巳が慌てて祥子を起こそうとした。

「本当に心当たりはないのかしら？そんな鈍感な妹に育てた覚えはないのけど…。シクシク、グスン」

白々しい台詞を言いながら、手はパソコンでファイルをミニFM局に送っていた。

蓉子は全てを把握して言うが、それでも惚けようとする祥子をチクチクと攻撃する。

祥子の手元にプリントアウトされたファイルが渡された。

「?!」

それは一枚の写真で、そこには祥子専属特殊部隊の隊員達が写っていた。

「見てくれたようね。どう、申し開きできるかしら？」

もう、これでもかと証拠を提示して来る。

「嫌ですわ。偶然の一致です。お姉さま、私、お姉さまの言い付けは守ってきてますし、これから、守っていく所存ですわ!」

なんとか気合いと根性で持ち直して、最後まで惚けた。

「アラ、随分嬉しい事言ってくれるじゃない。でも、最後まで惚けるつもりのようなね。良いわ。ちよつと待っててね」

何やら、ガチャガチャ音がすると、

「祥子さん」

の一声に祥子はのけ反った。

「蓉子さんに写真を見て欲しいと頼まれているんだけど、私じゃ解らないから、アリスに見てもらっているの」

清子の説明を聞いて、目の前が真っ暗になった。

すぐに相手がアリスに代わり、

「祥子お嬢様、申し訳ございません。全て蓉子様知られてしまいました」

と号泣しながら平謝りした。

携帯を返してもらうと、

「もう一度聞くわよ。私用で使ったの?使ってないの?」

物凄い殺気を込められた声がスピーカー越しに聞こえて来た。

それは祥子にとって死刑宣告を意味していた。

「ごめんなさい。お姉さま」

力無く謝ると、

「全く、いつまでたっても世話の焼ける妹だわ。まあ、妹にした時から、覚悟はしてたけどね」

と言って、豪快に笑う。

「祥子、迎えの車が行くから、それに乗って帰って来てね。寄り道をせず1人で帰って来る事、良いわね。それと祐巳ちゃん」

「はい、蓉子さま」

祐巳もビビっていて、呂律が回らなくなっていた。

「今日は一人で帰ってね。祥子の家の人が自宅まで車で送ってくれるそうよ。それと祥子ともつめる話があるから、今日は勘弁してね」

それまで、死んだように机に俯せになっていた祥子だがガバツと起きると、目は真っ赤にして鼻水と涙を豪快に垂れ流しながら、祐巳に助けを求めた。

お願い！

助けて！

殺される！

祥子の目はそのように訴えていたが、祐巳も知っていた。

蓉子のお仕置きは物凄く恐ろしいモノだと、よく理解していた。

その目で何度も直接見て来たのだ。

相手は聖や江利子、祥子、その他大勢と、その中の1人になりたくはなかった。

「解りました」

申し訳なさそうに言うと、そのまま祥子は壊れてしまった。

壊れた人ではその後の進行ができないので、祐巳が代わって進めた。番組が終わり、既に逝っている祥子を見送りながら、祐巳は固く誓った。

瞳子だけは真っ当な子にしようと思った。

既に日は暮れて、夜の帳が武蔵野の街を包み込んでいた。

これからの祥子の前途を示しているかのようにだ。

アーメン。

終わり

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7595i/>

第5回小笠原祥子の人生相談室

2010年10月12日04時02分発行